



1…大正蔵内部。複雑な小屋組は圧倒的な存在感がある。2…長大な桁行方向の昭和蔵外観。奥に天山を望む。3…応接室内部。これら3蔵と水車などは国の登録有形文化財に指定

天山酒造の酒蔵はその巨大さで際立っている。敷地東側から、昭和蔵、大正蔵、明治蔵が南北に伸び、連続して並ぶ。明治蔵は創業当時に建てられた蔵で、1918（大正7）年にその東側に大正蔵をU字状に増築し、続いて1927（昭和2）年に大正蔵の東側に平行して昭和蔵が増築された。これで三つの酒蔵の連結が完結し、現在まで仕込み蔵として稼働している。大正蔵、昭和蔵ともに屋根の両妻を半寄棟形状としている。天山酒造の酒蔵は木造建築としてはかなり大きな屋根面積をもつため、屋根を4面に分割することで、冬に北西から吹き下ろされる「天山おろし」から蔵を守る意味があったのではないかと推測できる。蔵全体が建築形状的にも特徴的な外観を構築していることにも注目したい。外壁は白漆喰に腰板杉板張り、木板張りの2段窓が連続しており、白漆喰と木板の対比が美しい。窓には瓦の水切り小庇を取り付け、桁行方向の長大さが山並に向かって強調されている。大正蔵の内部に露出した小屋組は複雑怪奇であるが、見るものを圧倒する存在感があり、当時の建築担当者たちの試行錯誤と蔵元の建築への熱い思いを感じ取ることができる。



昭和蔵の一角。左奥の大きな丸鋸は、製材所を抱えていた頃のもの。二代目は建築に造詣が深く、建築集団を擁していた



明治蔵・大正蔵・昭和蔵は国の登録有形文化財。佐賀県遺産に登録されている

三三  
天山  
てんざん  
天山酒造  
佐賀県小城市

蛍が飛び交う  
清流に建つ  
佐賀名峰の  
巨大酒蔵

秀峰天山の麓に建つ  
巨大木造酒蔵

天山酒造がある佐賀県小城市は、肥前小城市藩の城下町として栄え、風情ある町並みが残る自然豊かな小京都だ。県のはほぼ中央にそびえたつ秀峰・天山の南麓に位置する。この秀峰は、玄界灘と有明海に水を分ける分水嶺で、山肌に染み入る伏流水が祇園川を流れ、この地域の産業の発展に寄与してきた。天山酒造は、1861（文久元）年にこの豊かな清流を利用し、祇園川沿いで水車業、製粉・製麺業を始めたことに端を発し、1875（明治8）年に近隣の廃業する蔵元から酒蔵を買収し、酒造業を始めた。



仕込み水である天山中腹の伏流水は、ミネラル類を多く含む硬水。骨太で味わい深く、シャープな後味の懐の深い酒になる